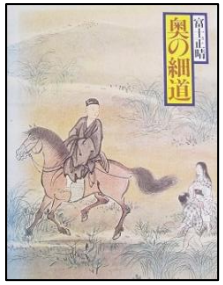
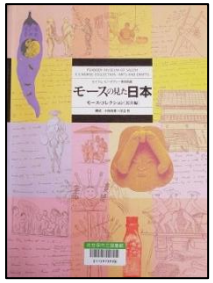
中学３年　国語　『奥の細道』　平成２５年１１月２７日　３年１組　　作成　佐世保市立大野中学校司書　梶川　由香理

『１０分でたどる奥の細道』

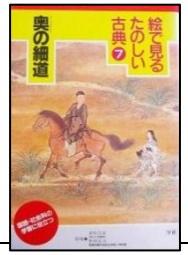
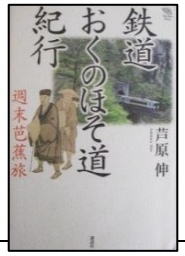
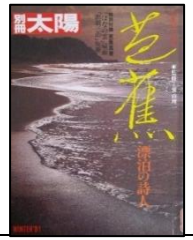
	原稿	資料	生徒の反応（他のクラス）
1	今日は、これからみなさんが奥の細道の学習をするということで、「１０分でたどる奥の細道」と題してお話します。	パワーポイント	
2	奥の細道は、江戸時代の俳人松尾芭蕉が、江戸から東北・北陸への旅をもとに書いた紀行文です。 まずは、この松尾芭蕉について簡単に紹介します。 松尾芭蕉は１６４４年、伊賀の国今の三重県生まれです。１０代から２０代は伊賀の国の侍大将の息子さんに仕えながら、その人と一緒に俳句を勉強しました。 ２９才で江戸に出てきてからは、俳句を教えたり、句会をしたり、旅に出たりと、俳句の道を究めていきました。 そして１６８９年の春の終わり頃、河合曽良というお弟子さんと２人で、『奥の細道』の旅に出発します。 その時の様子を描いた絵がこちら。 （絵を見せる） この旅に出発したとき、芭蕉は４６歳、曽良は４１歳でした。今の４０代といえば、働き盛りの年齢ですが、当時の平均寿命は今ほど長くはありません。芭蕉は５１歳、曽良は６０歳で亡くなっています。奥の細道の旅は人生の最後の方で出発した旅ということになります。 俳句の学習の時に、ブックトークで芭蕉の『辞世の句』を紹介しましたが、思い出してください。 「旅に病んで、夢は枯野を駆け巡る」でした。旅に強い思いを抱いている人でしたね。 さて、ここで問題です。どちらが芭蕉で、どちらが曽良かわかりますか？ 手を挙げてもらいます。		【感想】 ・46 歳になってまで旅に出ようと思ったことがすごい。

	（芭蕉だと思うほうに手を挙げる） 前が芭蕉、後ろが曽良ですね。 お坊さんのような格好なのは、関所を通りやすくするためでした。江戸時代の日本は、各地に関所があり、今の海外旅行でパスポートが必要なように身分証明が必要でした。でも、身分証明があっても、怪しいなぁと思われる人は入れません。そこでお坊さんの恰好をしておけば、「修行ですね」とすっと通してくれるのでお坊さんの恰好をしていたとされています。しかし、一緒に行った曽良は、実は神社の生まれで、神主さんでした。信じている宗教が違うお坊さんの恰好をすることはちょっと抵抗があったそうです。 さて今から旅に出ようとしている 2 人。でも、この絵をみると、ちょっとした疑問が出てきます。 皆さんが、修学旅行に行った時を思い出してください。比べて見てどうですか？ 荷物が少ないでしょう？ 曽良は後ろと前に何か背負っていますが、芭蕉にいたっては、笠と杖しか持っていません。実際にどんなものを持って行ったのかは、この『奥の細道』の中に書いてありますから紹介します。 （奥の細道を読む） 今では旅行といえば車や電車を使いますが、江戸時代にそんなものはありません。場所によっては、船にのることもありますが、もっぱら歩きでした。自分の足が頼りですから、荷物は小さく少なくしないといけませんでした。 では、江戸時代にはどんな旅の道具があったのかを写真で見てみましょう。 最初の写真は、芭蕉の杖です。これは資料に載っていたので紹介しました。 これは「携帯枕」です。中に物が入れられる作りの物と、折りたたみ式のものがあります。 また、「燭台」といって、ろうそくを立てる台なども組み立てできるものが出てきました。 筆と硯が一つになって持ち運びができるようになっているのは「矢立」といいます。 こちらは「頭陀袋」いわゆるバッグです。	『奥の細道』 富士正晴  『モースの見た日本』 セイラム・ピーボディー博物館  	【質問】 ・お坊さんの恰好はどこで手に入れたのか？ ・曽良とはどこでであったのか？ ・なぜ曽良といっしょに行ったのか？ ・少ない荷物でどんな風に旅をしていたのか？ ・食事はどうしていたのか？ ・岩手まで行ったのにどうして青森は行かなかったのか？ ・（携帯枕の写真から）どうして旅にそろばんが必要なのか？

	旅の道具は、小さく持ち運びがしやすいものに進化していきます。 これらの写真はこの本とこの本から紹介しました。		
3	旅の準備ができたら、出発です。 芭蕉は旅に出た日を、元禄２年１６８９年３月２７日と記録しています。これは旧暦の日にちですから、現在のカレンダーの日にちだと５月１６日にあたるそうです。 『奥の細道』の旅は、約２４００㎞、５か月におよぶ長旅でした。 ここに芭蕉のたどった旅の地図があります。 江戸から北上し、東北・北陸・をめぐって岐阜県の大垣までの旅でした。数えてみると、なんと１５県も回っています。 本州の地理に詳しい人は少ないと思うので、同じ縮図の九州の地図を重ねて見てみましょう。すると九州一周より長い距離を歩いて行ったことがわかります。 芭蕉の旅は様々な出会いがありました。松島を見て感動し、平泉では奥州藤原氏の栄華の儚さに涙して、最上川ではあの有名な俳句を作り、曽良と二人、協力しながら旅を進めていきましたが、旅も終わりに近づいたころ、曽良が腹の病気になり、三重県の親戚の家に行くことになったので、「山中」というところで別れ、その後は別々に旅をすることになりました。旅が終わる１ヶ月前でした。 実は、松尾芭蕉には、ある有名なウワサがあります。 それは、「松尾芭蕉は忍者だった」というものです。 その理由として、芭蕉の年齢に対して体力があるということと、出身地が伊賀だったことが挙げられていて、奥の細道の旅も幕府の密命だったという人もいるのですが、のちの研究では間違いではないかといわれています。しかしそれほど、厳しい旅にでていたのですね。 では、どうしてこんな長い旅に出ようと思ったのでしょうか。 この旅の目的の一つには、歌枕をたずねることがありました。歌枕とは、古い歌に詠まれた名所のことで、芭蕉はそこを訪ねて行きたいという思いがありました。その場所でしか感じるこ		【感想】 ・九州よりも長い旅を自分で歩いて行っていて、体力と忍耐力と精神力があるなと思った。 ・自分には無理だと思う。 ・15 県もまわっているなんてすごい。 【質問】 ・芭蕉と別れて旅をすることになった曽良は、その後どうしたのか？ ・大垣についた後、芭蕉はどうやって江戸に帰ったのか？ 【感想】 ・こんなに長い距離を旅したのなら、忍者だったというのも、嘘じゃないかもしれない。

	とのできない、景色を見たかったのでしょう。 また、尊敬している昔の人に関する場所に行ってみたいとも思っていました。 芭蕉は西行や能因の他にも、中国の詩人李白や杜甫にもあこがれていて、彼らが旅に生きたことで、自分も旅をしたいと思っていました。杜甫の有名な漢詩は、平泉の段で紹介されています。 すべては、さらにいい作品を作るため、心を豊かにするためでした。 また、それぞれの場所で、芭蕉が詠んだ俳句は、石に刻まれ「句碑」として各地に残っています。それらは、名作『奥の細道』とともに、後世の人々を旅に誘い、日本の素晴らしい場所を再発見させてくれています。	『石に刻まれた芭蕉』 弘中　孝　　智書房 	【質問】 ・歌枕をいくつくらい尋ねることができたのか？ ・俳句はいくつくらい詠んだのか？
4	江戸時代において、旅をすることの大変さを知れば、奥の細道にかける芭蕉の思いも、感じられるかもしれません。		

≪その他参考図書≫

写真					
書名	『絵で見るたのしい古典⑦ 奥の細道』	『鉄道　おくのほそ道紀行』	『調べ学習　日本の歴史 ⑭町人の研究』	『江戸の暮らし』 フルカラーＣＧ浮世絵古写真ビジュアルで甦る江戸の町と生活文化遊び	別冊太陽 『芭蕉　漂白の詩人』
著者名		芦原　伸			
出版社	学研	講談社	ポプラ社	双葉社	平凡社